

## 2021年パリ祭

7月14日小雨模様の肌寒い中「パリ祭」軍事パレードが行われた。昨年はコロナ禍の影響で「パリ祭」は無観客、コンコルド広場だけに縮小された異例の開催だった。一年経った今年のパレードは制限付きとは言え、例年通りシャンゼリゼ大通りを行進する形に戻ることができた。集団ワクチン接種の効果で、沿道の観客はマスク着用、2回のワクチン接種を終えて最低2週間を経た者に限られた。



6月末コロナ禍制限が解除されたフランスだったが、2週間でデルタ株があつという間に拡大した。一旦は一日の感染者数が1000を下回ったが、再び上昇傾向にある。手遅れにならないよう7月12日(月)夜マクロン大統領がテレビ会見を行い、緊急のコロナ対策を発表した。デルタ株拡大を阻止するためにワクチン接種を強制する決断である。

7月中旬フランスのワクチン接種率(2回の接種終了者)は国民全体の40%で集団免疫には至らない。

マクロン大統領は、

- ① 医療関係者、高齢者介護関係者、救急隊員を始め、一般の人を相手にする職業に対してワクチン接種を義務付けた。9月15日が期限でそれまでに2回の接種を終了しない者は解雇という厳しい条件である。スーパー、飲食店、スポーツ施設なども対象である。
- ② ②ワクチン接種パスがない者は7月21日からは50名を超える場所に入れない。
- ③ ③8月1日からはカフェ、レストランもパスなしでは入れない。
- ④ ④現在フランスのPCR検査は無料だが秋からは有料になる。
- ⑤ ⑤長距離の列車、バス、飛行機などワクチンパスが無ければ利用できなくなる。

要するにワクチン接種をしなければ日常生活が送れなくなるということだ。副反応を危惧する人に限らずワクチン接種を拒否する人は少なくない。「強制」=「自由迫害」と訴え

る人もいる。ワクチン接種強制反対デモも各地で起こっている。何事も強制を嫌がるフランス人、予防接種義務への反発も理解できるが、ワクチン接種がコロナ禍の出口であることは確かだと思う。自己と他者をパンデミーから守るためのワクチン接種を義務付けることに賛否両論ではあるが、12日のマクロン大統領会見から若い世代のワクチン接種に拍車がかかっている。

2ヶ月後に控えた9月新学期のあり方に危機感があるからだ。一年間オンライン授業を強いられ、教室での対面授業を受けられなかった学生たちにとってワクチン接種は学生生活を続ける必要条件になる。7・8月でワクチン接種率をどこまで上げることができるか、まだまだコロナ禍は終わらない。

フランス人の多くはコロナ禍制限に疲弊し、7・8月夏のバカンスは楽しみたいと願っている。私自身コルビュジエ船の管理があるのでパリを離れることはできないが、マスクとワクチン・パスでできる文化活動を楽しみたいと思い、「ガブリエル・シャネル回顧展」に行った。



パリ16区にある「ガリエラ宮」(2年間の改修工事を終えて真っ白な外壁が綺麗だ)は新たなモード美術館として生まれ変わった。

1920年から1960年代の350点を超えるシャネルの作品を展示した「ファッション・マニフェスト展」である。

ロワール地方ソミュールに生まれたガブリエル・シャネル(1883-1971)は帽子デザイナーとしてパリで活動を開始する。富裕な投資家に援助を受けて1910年カンボン通り21番地に最初のシャネル・ブティックを開く。1913年にはドーヴィル店を開き、第一次世界大戦が始まり、物資が不足する中、男性に代わり働く女性たちが動き易く、シンプルでかつオ

シャレな服を作る。1920年、30年代のローウエストのチャールストン、刺繍で飾った軽やかなドレス、ツイードのスーツやコート、60年代までのシャネルらしい服は現代の女性も着たいと思う服である。100年経った今もシャネルの服はモダンだ。シンプルで自然なラインを尊重し、白や黒を基調に洗練されたエレガントな衣装、戦争や逆境にあっても女性の期待に応え、女性を解放する服を作ることができたシャネル。時代が求めるものは何かを考え、男性の背広に近い女性のスーツをデザインし、その新しさは今でも素敵に思える。モードに限らず歴史を作るのは時代を先駆ける人なのだろう。



1927年春-秋コレクション  
(アンサンブル、絹)



1958年秋-冬コレクション  
(シャネルが着ていたツイード  
のスーツ)



1960年春-夏コレクショ